

友七。よ。どうだ、友七……ではない、出家の名は何と云つたなう。

源兵衛。今夜からは友禪と名乗るのぢや。

友七。お、友禪。その友禪の名に因んで、友禪模様といふのを書き出してはどうだな。

友七。出家が女の着物を書くのか。(さびしく笑ふ。)

友七。出家と云うてもお前は繪法師、女子の小袖を書いたとて、佛のお叱りもござるまい。

わしもあの繪を書いてゐるあひだは、いつも春めいた心であつた。その温かい心持をいつまでも忘れぬやうに、繪筆を握つて一生を送らうか。

(奥にて千秋萬歳の謠の聲きこゆ。)

おいよ。お、奥では祝言の謠が始まつたさうな。

(友七はそこにあるお京の嫁入衣裳の破れたるをかへて、謠の聲に耳をかたむく。)

幕

邯

鄲

大正十年七月作。

大正十年九月。帝國劇場初演。

初演當時の重なる役割——盧生（市川三升）邯鄲の翁（尾上幸蔵）娘（初瀬浪子）  
宰相（松本幸四郎）美女二人（東日出子、小原小春）など。

登場人物——蜀の盧生。邯鄲の翁。その娘。宰相。美女甲、乙。宮女六人。下官一人。

(一)

唐土、唐の時代。邯鄲の里。

唐風の田舎家。家のうちは土間に、上のかたには少しくあとにさげて寢床あり。寢床は普通の床よりやや、高きくらゐに磚をつみて、その上にあらき筵をしき、床より上には帷を垂れたり。寢床の入口は半分だけ壁にて仕切る。土間のまん中にはテーブル様の長方形の卓をすゐて、そのまはりに木製の榻二脚ほどを置く。正面には板戸の二枚扉の出入口あり。下のかたには大いなる土櫃ありて、その上に平釜をかけ、棚には勝手道具など少しばかり載せてあり。門口には秋のやなぎ一本立てり。

（砧の音にて暮あくと、むすめは家の前に筵をしきて、砧を搗つてゐる。すぐに常磐津の淨瑠璃に

常磐 〽うき世の旅にまよひ来て、夢路をいつと定めん。すみ馴れし國を千里のあとに見て、山また山を越えゆけば、そこもしも無き旅衣。野暮れ山暮れ里くれて、名にのみ聞きし邯鄲の、里にぞ早く着きにける。

(向ふより盧生、族妾にて小さき包を背負ひ、笠を持ち出て出づ。)

盧生 急ぐほどに、これは早や邯鄲の里と見ゆる。(空を仰ぐ)まだ日は高いやうなれど、こゝらで旅宿を假らうと存ずる。(門口に来る)いかに案内申す。

(砧の手をやすめる)なんの御用でござります。

娘 〽これは旅人でござる。一夜の宿をお貸しくだされ。

これは宿屋ではござりませぬ。

盧生 〽さりとて足の疲れてござる。一河のながれ、一樹の蔭、それも他生の縁と聞く。宿假す家にはあらずとも。

常磐 〽まけて今宵のおん宿を、許させたまへと申しける。

娘 折角のお頼みではござりますれど、御覽の通りのあばら家にて、なんの用意もござりませぬ。

常磐 ぬ。これより東へ三里ほどお越しなされば。(上のかたを指さす)然るべき宿屋もござります。あきの日のくれぬ間に、急がせたまへ、行きたまへ。路は一筋まよふまじ。

娘 〽この街道をまつすぐに、東へ東へと行くならば。

常磐 〽細きながれの幾曲り、その水上の村里に、宿かす家も候ふぞ。

些とも早うお越しなされて、疲れをおやすめなされませ。

盧生 いや、いや、それがしは朝まだきより宿を出てかやうに歩み疲れし者。この上に二里三里は、近ごろ難儀至極でござる。まして御覽せよ、變りやすきは秋の空、雲のゆく手も定まらず、やがて一村雨のはらくと、旅の袂を濡らすかとも見え申すわ。兎もかくも暫しの間、なにとぞ軒端をお貸しくだされ。

常磐 〽門の柳は招けども、まねかぬ人の雨やどり、軒端貸すさへ案じられ、むすめごころに兎つおいつ。

(盧生は背負ひたる包みをおろして、家の内に通らうとするを、娘は胡亂に思ひて遮る。)

盧生 〽では、どうでもならぬとお云やるか。

娘 〽なりませぬ。お氣の毒ながら次の里まで。

邯鄲 邯鄲

盧生。

さりととは情ない娘御ぢやな。

常磐

思案なかばに向ふより、薪を老のいそぎ足。

(雨の音。向うより主人の翁は枯杖を背負ひ、杖をつきて出づ。)

翁。

常磐

今日の日和にだまされて、蓑笠持たずに宿を出て、野路の村雨さりととは辛や、

走ればつまづく、休めば濡る。肩の重荷によろくと、よろめく足を踏みしめて、ほと

つと一息つく杖の、折れたら大事ぢや合點かと、ひとり言して歸り来る。

やれ、降つて来た、降つて来た。もう一足進かつたら、薪をすつかり濡らせてしまふところぢや。(門に来る。)

や、これは見馴れぬ旅のお人かな。雨やどりにでもお寄りなされたか。このお人は一夜の宿をたのむとのことなれど、こゝは宿假すところで無し、これより先へ

お越しなされとお勧め申してゐるところへ、俄にふり出したこの村雨。

やれ、やれ、それはお氣の毒や。お宿をするとせぬとは扱置いて、この俄雨では外へもう

かとは出られまい。兎も角も内へお這入りなされ、お這入りなされ。

それは千萬かたじけなうござる。

常磐

見識らぬ人にも隔てなき、あるじの情うれしくて、笠も包みもそのままに、盧生は奥へ

盧生。

翁。

娘。

翁。

打ち通る。

(盧生は翁に會釋して内に入り、まん中の欄に腰をかける。翁はむすめに手傳はせて枯杖をおろせば、娘はそれをかへて籠のそばへ運んでゆき、そこの碇などを片附ける。)

翁。

して、旅のお人には、どこからどこへとお越しなされますぞ。

盧生。

これは蜀のかたほとりに住む盧生と申す者でござる。われ人間にありながら。

常磐

神も知らず佛も知らず、たゞ茫然と年月を、いたづらに暮すばかりなり。

盧生。

このたび楚の國羊飛山に、たふとき聖のまします由、うけたまはり及びて候ふほどに、その教へをうけばやと思ひ立ち。

常磐

國を離れ家を捨て、千里の遠きを厭はずに、はるる尋ねてまゐりしぞや。

翁。

いや、それは御奇特なことござる。長途の旅にさぞお疲れでござりませう。ひと村雨の通り過ぐる間、先づゆるくと御休息なされ。して、旅のお人にはおひもじいことはござりませぬか。この通りの田舎家で御馳走とでもござりませぬが、御所望ならば有合せの粟

の飯でも炊かせて進ませませうか。

盧生。

それは何よりの御馳走でござる。

邯鄲

翁。喫べさせられますか。

盧生。喫べ申さう。

翁。焚物も丁度今拾ひあつめてまゐりました。これ、娘よ。お客人に御馳走するのぢや。釜の下を焚き付けたがよいぞ。

娘。あい。(不安らしく父の顔をながめてゐる。)

翁。盧生に。もし、お前様。これから粟の飯を焚いて進ぜますほどに、それまであちらの寢床へ行つて、しばらく御休息なされませぬか。

盧生。なにから何まで忝けない。では、粟の飯の出来るまで奥の寢床を借り申すぞ。

翁。さあ、かうお出でなされ。

常磐。M かり寢の宿も後の世に、語りつたへし邯鄲の、枕は夢のうき世ぞと、知らず悟らず臥しにけり。

翁。(翁は盧生を案内して、上のかたの寢床へ連れてゆく。盧生は帷をかゝけて入る。)

翁。さあ、さあ、ゆるくとお休みなされ。枕もそこにござりまするぞ。

(云ひ捨て、翁は土間のまん中へ引返して来る。)

娘。(下の方より伸びあがる。)もし、父様。旅のお人は寢られたのでござりますか。

翁。大分疲れてるらるゝやうぢやで、粟の飯の出来る間、奥で休ませてあげたのぢや。

娘。(進みよる。)もし、父様。

翁。なんぢやな。

常磐。M 掬きびしい今の世に、素性も知れぬ旅人をうかく内へ引き入れて、もし御咎めのあるときは、わたし等親子はなんとなる。雨のはれ間を幸ひに、斷り云うて出してやり、後日の難儀ないやうに、たのみますると掻き口説く。

(娘は不安らしく奥をうかがひ、どうぞ盧生を追い出してくれと、口説模様にて父にたのむ。)

翁。はて、氣遣ふことはない。わしは人相見ではなけれども、人の善悪は大方ひと目に知らる。あの旅人は盧生と云うて、尊い聖の教へを聴くために、遠い蜀の國からはるゝと出てまゐられたとやら。

娘。それはほんたうでござりませうか。

翁。ほんたうぢや、ほんたうぢや。

娘。嘘ではござるまいか。

邯鄲

翁。

嘘でない。嘘でない。さあ、さあ、日のくれぬ間に、早う竈の下を焚きつけて、粟の飯を炊く支度をしやれ。

娘。

あい、あい。

翁。

(竈と奥とのぞく。) おも、よつほど疲れてござると見えて、もうすやくと寝入られたやうぢや、どれ、わしも奥へ行つて一休みせうか。(娘に。) これ、早うせいよ。

常磐

父の指圖に是非なくも、枯枝を折る、粟をとぐ。竈の烟しろくと、賤が軒端にたなびけり。

(翁は奥に入る。むすめは枯枝を折り、鍋にて粟を洗ふ。舞臺だんくに暗くなりて、暗中に道具變る。)

(11)

唐土の阿房殿。上の方へよせて少しく斜めに唐土風の壯麗なる宮殿、雲龍や鳳凰などを繪きたる朱塗りの太き柱あり。左右に高欄、正面に石の階段あり。階段の下は一面の石畳を敷く。うしろは正面より下の方にかけて、櫻花爛漫たる春のけしきなり。

長唄

あら不思議なる景色やな。ひんがしに三十餘丈の白銀の山を築せて、黄金の日輪を出だされたり。西に三十餘丈の黄金の山をつかせて、白銀の月輪を出だされたり。

常磐

雲龍閣や阿房殿、樓閣そびえし粧ひは、この世の物とも見えざりし。(この中に舞臺だんくに明るくなると、唐樂のひゞき囀るときこえて、下のかたより宮女六人出て、階段のまへに來りて一禮し、順々に階段をのぼりて、奥の帷をあけて入る。ついで下の方より宰相は下官ひとり酒の壺を持たせて出で、階段の前にひざまづく。)

宰相。

いかに奏問申すべきことの候ふ。

常磐

つゝしんで言上す。盧生はむかしの旅衣、いまは錦の袖にかへ、後宮の美女を左右に侍らせ、しづ／＼として出でたまふ。

盧生。

して、奏問とは何事にて候ふぞ。(やはり唐土になり、奥より盧生は前とかはりし王者のすがたにて、美女二人を左右にしたがへ、以前の宮女六人も附添ひて出づ。盧生は珠の榻に倚る。)

那 耶

宰相。

奏問のおもむき餘の儀にも候はず。君この國を治めたまひてより早や五十年と相成り申して候。おそれながら人間の齡にも限りあり。唯今のうちにこの仙薬をきこし召さば、おん年一千歳を保ちたまふべし。

盧生。

して、その仙薬とは。

宰相。

即ち天の濃水なり。

盧生。

そも天の濃水とは。

宰相。

これ仙家の酒の名なり。

常磐

いざ召されよと勸むれば、盧生は兎かうのいらへ無く、差俯向いてぞおはします。

美女甲。

さりとは心得ぬことにて候ふ。唯今宰相の申さるゝごとく、わが君この國を治めたまひてより、已に五十年の月日を過させたまふ。

美女乙。

この上に百年千年の齡を保たせたまふには、無くてかなはぬ彼の仙薬、疾うくこれにてきこし召し候へ。

宮女一。

わたくし共も共々に。

六人。

君におすゝめ申し候ふ。

盧生。

かたぐの志はさる事なれど、われ此國を治めて五十年、初めのほどは富貴歡樂をほしいまゝにして、人間の樂みもこれにて足れりと存せしが。

常磐

まことに悲みの絶えぬ世や、苦みのおほき世や。

盧生。

(起ち上る)あれ、聞け。玉を飾りし樓門の外には、もろくの民百姓、あるひは商人女わらべに至るまで、老いたるも若きも地にひれ伏れて、人間の苦みを叫び、人間の悲みを訴へ。

常磐

泣き狂ふ聲々の、耳をつらぬいて聞ゆるを、いかにして救ふべき、助くべき。

盧生。

それを思へばいたづらに、百年千年の齡をのべ、われのみ榮華に耽りて何かせん。

常磐

推量せよとありければ、理に責められて宰相もしばし詞もなかりけり。

美女甲。

そのおん惱みを拂ふには、酒に如くものは候ふまじ。

盧生。

いや、その惱みはなかくに救はれ申すまじ。

美女乙。

(盧生は階段をおりかゝるを、美女二人は左右より支へる) して、わが君にはこれよりいづ方へ渡らせたまふぞ。

盧生。

われも宮殿の外へ出て、かれらが苦まば共に苦み、かれらが悲まば共に悲まんとこそ存じ

候へ。こゝを放され候へ。

宰相。

さりとては以ての外のことにて候ふ。くどくも申すやうなれど、仙人の家より傳はりし天の濃水、齢をのぶるは兎も角も、愁ひをはらふ靈藥と思召して、こゝろみに一杯をお過し候へ。

美女甲。

(宮女に)それ、玉のおん杯をまるらせよ。

宮女。

はあ。

(宮女の一人は奥に入る。)

盧生。

どうでも我にのめと申すか。

宰相。

一統の願ひ、まけてきこし召し候へ。

盧生。

(思案して)よい、よい。この上は一杯はおろか、二杯も三杯も百杯も千杯も、かさねて飲まうするにて候ふ。(もとの席に戻る)誰かある、下物に歌ひ候へ。

美女甲。

心得て候ふ。(歌ふ)壽命は千代ぞと菊の酒。

長唄

榮華の春もよろづ年、君もゆたかに民榮え。

(この中に宮女は玉のさかづきをさへげて出で、盧生のまへにある卓の上に置く。)

美女乙。

(歌ふ)國土安全長久の。

長唄

めでたき數も重なりて、猶よろこびはまさり草の、菊のさかづきとりぐに、いざや飲まうよ。

(宰相は下官より酒の壺をうけ取り、手づからさへげて階段の前にひさまづけば、宮女の一人は階段を降りて壺をうけ取る。宰相は元の席にかへれば、下官は一禮して去る。盧生はさかづきを把りあげて、宮女に酌をさせて飲む。)

盧生。

歌うばかりでは面白くない。(美女二人を見かへる)かたぐには舞ひ候へ。

甲乙。

はあ。

(美女二人は唐扇を持ちて階段の下におり立つ。)

甲乙。

(歌ふ)めぐれや杯の、めぐれや杯の。

常磐

汲めども盡きぬ菊の水、そのさかづきに影やどる、わがおもかけのいつまでも、變らで年を経るならば、君がなさを身にしめて、菊の着せ綿菊ごろも、花の袂をひるがへし、幾千代までも舞ひ遊ぶ。

(この舞のうちに盧生はさかづきを置きてちつと考へてゐたりしが、思ひ切つて宮女に再び酌をせ



宰相。

よといひ、二杯も三杯もつゞけて飲む。美女二人は舞ひ終り、一禮して元の座にかへる。

いや、かたぐの舞の手振り、いつもながら鮮かに相見え申して候ふ。われらも興を添ふ

長唄

菊の白露こほれて落ちて、幾代つもりて淵となるらん。よも盡きまじ。

常磐

あれ御覽ぜよ大庭の、黄菊しら菊花の香に、慕ひ寄るかや比翼の蝶の、ひらりく、ひらひらひら、風にみだるゝ影二つ、追へども打てどもなかくに、春の陽炎、あきの霧、あるかと思れば無かりけり。

宰相。

(舞ひ終りて。)はゝゝゝゝゝ。無禮は平におゆるし下され候へ。

盧生。

いや、面白い、面白い。われも次第に酔うて来た。いや、酔はねば逆も此世に生きてはるられぬ。酔うて、酔うて、酔ひ潰るゝまでに飲むほどに、さあ、さあ、入れかはつて賑かに歌ひ、華やかに舞へ。

宮女。

はあ。

常磐

(宮女等は打揃うて階段の下におり立つ。)

天津乙女も斯くやとばかり、雲の羽袖をかさねつゝ、よろこび歌ふぞ面白き。

宮女一。

(歌ふ。)そもこの宮殿は古への阿房宮になぞらへ。

宮女二。

(歌ふ。)阿房殿とこそは申すなれ。

宮女三。

(歌ふ。)こゝに住む人々は榮華歡樂のかぎりを盡して。

宮女四。

(歌ふ。)さながら天上にあるが如し。

宮女五。

(歌ふ。)けに天上の日月は人間にことなりて。

宮女六。

(歌ふ。)明くるをしらず、暮るゝを覺らず。

常磐

夜かと思へば。

長唄

晝となり。

常磐

ひるかと思へば。

長唄

月また冴けし。

常磐

春の花さけば。

長唄

もみぢの色濃く。

常磐

夏かと思へば。

長唄

雪もふりて。

郡

郡

宮女六人。(歌ふ)四季をりくは眼のまへに。

常磐 春夏秋冬、萬木千草も、一日のうちに花さけり。

(この舞のあひだに正面の背景は、櫻より紅葉となり、青葉となり、雪となり、四季をりくのけしきに變る。)

盧生。(浮かれ立ちて歌ふ)面白や、不思議やな。

美女二人。(共に歌ふ)面白や、不思議やな。

(盧生は起つて階段を降り、美女二人もつゞいて降り立つ。)

盧生。(歌ふ)面白や。

一同。(歌ふ)不思議やな。

(賑かなる唐樂になりて、盧生をまん中に、美女、宰相、宮女等が輪になりて舞ふ。よきほどに樂の音俄にやみて舞臺眞暗になる。)

(III)

もとの邯鄲の里の道具。

(舞臺明るくなると、娘は卓のうへに飯の道具をならべてゐる。奥より主人の翁出づ。)

これ、これ、娘よ、飯の支度はもう出来たか。

父様、もうこの通りに出来ました。

さうか、さうか。して、お客人はどうなされた。

まだ眠つてゐられるやうでござります。

ほう、まだ眠つてござるか。鳥渡行つて見て來やれ。

あい、あい。

(娘はぬき足して上の方へゆき、帷をかゝけて寢床をうかゞへば、盧生はうしろ向になりて寢てゐる。翁も立寄つて外よりのぞく。)

やつぱり眠つてござるか。

よい心持さうにすや〜と……。

では、よび起して、飯の支度も出来ましたとお知らせ申すがよい。

(帷の外から)もし、お客様、お客様。こりやよつほど好く寢入つてござるさうな。お客様

翁。娘。翁。娘。

翁。娘。翁。娘。翁。娘。

邯鄲

……お客様……。

翁。呼んで起きずば帷をあけて、ゆり起したがよいぞ。

娘。でも、それは……。

翁。はて、遠慮するには及ばぬことぢや。折角の粟の飯が冷えてはならぬ。そばへ寄つて揺り

おこせ、ゆり起せ。

常磐

早う早うとせき立つれど、まだうら若き娘氣に、知らぬ男の枕邊へ、寄るを流石には、

かりて、行きつ戻りつおづくくと、進み兼ねてぞるたりける。  
(娘はぬき足して進み入り、帷をかゝけて内をうかゞひしが、自分は忌だと頭を掉りて、父にゆり起してくれと云ふ。父は焦れて早く起せといふ。むすめは矢張り頭を掉つてゐる。)

翁。はて、何をいつまでぐづぐづしてゐるぞ。よし、よし、わしが行つて起して来るほどに、

おまへはこつちへ退いて居れ。

翁。(娘は土間のまん中へ引返して来る。翁は入れかはりて寢所に入る。)

これ、お客人、旅のお人。やがてもう日が暮れまするぞ。粟の飯も出来ました。さあ、さあ、お起きなされ。お目をおさましたなされぬか。(大きく呼ぶ。)

常磐

帷を左右に押しひらき、呼びつ揺りつ引きおこせば。

長唄

盧生は夢さめて、盧生は夢さめて、五十年の春秋の榮華もたちまちに、消えて跡なくな

りければ、たゞ茫然と起きあがりて。  
(翁は立ち寄りて帷をあけると、盧生はやうく起き直り、枕に倚りかゝりて、ほつと息をつく。)

翁。もし、どうでござる。お目が覚めましたか。

盧生。(あたりを見まはす。) お、こゝはいづこでござるな。

翁。こゝは邯鄲の里でござる。

盧生。なに、邯鄲とな。なるほど思ひ當つてござる。先刻の村雨にしばらくこゝの宿を借りて、

休息いたすと思ふうちに、ついうとくと眠りしよな。

翁。その眠つてゐる間に、粟の飯がもう出来ました。さあ、あれへ行つて早うおあがりなされ

ませ。

盧生。粟の飯が出来申したか。

翁。たつた今出来ましてござります。

盧生。みじかい間に長い夢ぢや。

邯鄲

翁。娘。え。

盧生。

あゝ、夢ぢや、夢であつた。さばかり多かりし宮女舞樂の聲と聞きしは松風の音となり。  
長唄 〽 宮殿樓閣はたゞ邯鄲の假のやど、榮華のほどは五十年、夢のあひだは粟の飯の一炊の間なり。不思議なりや。測りがたしや。

(盧生は枕をかへてちつとなる。)

盧生。

この上はわざ／＼羊飛山にたどり着きて、聖の教へを乞ふに及ばず、われらはこのまゝ故郷へ立歸り申さう。(寢床を出る。)

翁。

では、このまゝ故郷へ引返すと申されますか。

盧生。

唯今の夢にて悟り申した。

常磐

〽 づらく人間のありさまを案ずるに、百年の歡樂もたゞ夢の世の夢ぞかし。

盧生。

われらはすぐに立歸る。笠と荷物をお渡しくだされ。

娘。

はい、はい。

翁。

(娘は笠と荷物を持ち来れば、盧生はすぐに荷物を背負ふ。翁は不審さうにながめてゐる。)  
それにしても、もう支度も出来ましたれば、せめてこゝで夕飯を……。

盧生。

折角ながらすぐにお暇……。

娘。

では、どうでもこのまゝに……。

盧生。

くどくも申す通り、けに何事も黄梁一炊の夢。

長唄

〽 けに有難や邯鄲の。

常磐

〽 夢のうき世と悟り得て。

雨吟

〽 のぞみ叶へて歸りける。

(盧生は笠をかざして、元來し路を向うへ急ぎ去る。翁もむすめも呆氣に取られてあとを見送る。)

——幕——

寺  
の  
門  
前  
(喜劇)

大正十一年五月作。

大正十三年六月。演伎座初演。

初演當時の主なる役割——善隆（市川荒次郎）隆格（市川團次郎）長太（中村錦藏）長吉（河原崎長十郎）おとく（片岡當之助）町子（片岡龜松）など。

**登場人物**——寺の住職善隆。寺のむすめ町子。花屋の娘おとく。犬殺し長太。その弟長吉。納所隆格。檀家總代大崎、吉田。ちんばの乞食。寺まるりの母と娘など。

時は現代。秋の日の午後。

場所は浅草のあたり、ある寺の門前。すこしく上の方にやせて屋根附の門あり。門につゞいて下の方には潜り戸があげられて、そこには小さき花屋の店が横向きにみゆ。花屋の店には櫛や草花などが積まれ、高箒や手桶などがあり。往來にむかひし方は半窓にて、それより下のかたは扇骨木の生垣、そのなかは墓地と知るべし。上の方もおなじく生垣にて、門内には紅らみたる柿の大樹、そのほかにも植込の立木ありて、本堂に通ふ石だたみあり。

（犬殺し長吉、十七八歳、犬の死骸を入れる箱車を下のかたに置いて、地にしゃがんでゐる。花屋の娘おとく、これも十七八歳、手桶と柄杓を持ちて門前に水をまいてゐる。上のかたには啞にて賦

おとく。足の乞食の男、竹杖をそばに置いて坐つてゐる。門内より母と娘らしき参詣人出づ。  
(會釋する。もう御参詣はお済みになりましたか。)

母。毎度御厄介になります。

おとく。毎度ありがたうございます。

(母と娘は下の方へゆきかけ、娘は乞食の方を見かへりて母の袂をひけば、母はうなづきて立戻り、乞食に幾らかの金をやれば、乞食は無言にて頭を下げる。母と娘はそのまゝ下のかたへ立去る。おとくは水をまき終りて門内に入る。長吉はうつむいて居睡りをしてゐる。やがておとくは手桶をまげて再び出て来り、水を撒かうとして左右を見かへる。)

おとく。

困るわねえ。(長吉のそばに来る。)ちよいと少し退いておくれよ。水をまくのに困るから。さあ、ちよいと退いて……。あら、寝てるの。仕様がなねえ。

(おとくは手桶を下におきて、長吉をよび起す。)

おとく。

ちよいと、起きておくれよ。長ちゃん。そんなところに寝てゐると、兄さんに叱られるよ。え、長ちゃん、巡査に叱られるよ。

長吉。(はつと眼をあく。)巡査……。

おとく。(笑ひ出す。)ほゝ、寝ほけてゐるんだよ。

長吉。(眼をこすりながら。)だつて、巡査にやあ懲りくしてゐる。何度警察へ連れて行かれたか

知れやしねえ。

おとく。首環のついてゐる犬を殺したからだらう。おまへが悪いんだから仕方がないぢやないか。

長吉。おいらぢやあねえ。兄貴が殺したんだ。それでもおいらまでが一緒に連れて行つて涼ま

れるんだもの、遣切れねえや。

おとく。だつて、おまへも手傳つたんだらう。

長吉。手傳はなければ兄きになぐられるからなあ。どつちにしても助からねえや。それにしても、

兄貴はどこへ行つたんだらう。

おとく。さつきから歸らないやうだよ。

長吉。また居酒屋へ行つたかな。それともあすこのチャン蕎麥でも食ひに行つたかな。どれ、お

いらもシウマイでも食つて来ようかな。(起ちあがる。)

おとく。あら、いけないよ、そんな車をそこへ置いていつちやあ。

長吉。おいら一人ぢやあ挽けねえもの。

おとく。だから、兄さんの歸るまで待つておいでよ。一體その車には何匹遣入つてゐるの。

長吉。けふはまだ一匹も殺さねえ。兄きも自棄で飲みに行つたんだらう。

おとく。犬を一匹殺すと幾らになるの。

長吉。警察から貰ふのは一匹二十錢さ。

おとく。皮や肉も賣るんだらう。

長吉。む。それでなけりやあ商賣にならねえ、皮も肉も骨もみんな賣るのさ。

おとく。(顔をしかめる。)忌な商賣だわねえ。

長吉。(嘲けるやうに。)それでも坊主の妾よりましだ。

おとく。(きよつとして。)え、なんだつて……。

長吉。なんでもい。近所でみんな知つてゐらあ。

おとく。(腹立たしげに詰める。)なにを知つてゐるんだよ。

長吉。は、大黒様が般若になつた。怖い、怖い、食ひ殺されねえうちに、逃げよう、逃げよう。

おとく。(長吉は下のかたへ駈出してゆく。)

おとく。仕様のない子だねえ。

(おとくは腹立たしげに長吉のうしろ姿を見送り、やがて手桶の水をそこらへ撒きはじめる。下の方より寺のむすめ町子、十九か廿歳ぐらゐ。學校より戻りし體にて風呂敷包みなかへ、袴靴。洋傘を持ち出て出す。)

おとく。お歸りなさいまし。

町子。(車を見かへる。)あら、又こんなところへ車を置いて……。これは犬殺しの車だらう。(顔をしかめる。)なぜ見付いたら叱らないのよ。

おとく。兄さんはどこかへ行つてしまつて、弟ばかりがそこにゐるんです。

町子。弟でもなんでもい、から、こんなところへ車を置いてちやいけないと云つて、きびしく叱つてやればいゝのに……。

おとく。さう云つたんですけれど、いつの間にか何處へか行つてしまつたんです。

町子。(舌打するやうに。)ほんたうに仕様がないわねえ。(云ひながら更に跣足の乞食に眼をつける。)あら、そこにも乞食が……。なぜ家の前にはこんなものばかり寄り集まつて來るんだらう。

おとく。(すこし同情するやうに。)あれは啞で跣足なんですから。

町子。啞でも跣足でも、家の門のまへに坐つてゐられちや困るわ。(命令的に。)こんなところになる

寺の門前



町子。

ちやあいけないと云つて、早く追ひ拂つておしまひなさいよ。お父さんに屹と叱られるわ。  
(おとくはよんどころなく乞食のそばへ進みゆきて、手真似にてあちらへゆけといふ。乞食は無言にて幾たびか頭を下げるので、おとくは又すこし躊躇する。)

(おとくは再び乞食にむかひて、あちらへ行けと追ひ立てる。乞食は澁々ながら起ちあがり、町子の方を尻目に視て、杖にすがりながら上のかたに立去る。)

町子。

今度からあんなものが來たら、すぐに追ひ立て、おしまひなさいよ。(再び大殺しの車を見かへる。)ほんたうにこの門前をなんと思つてゐるんだらう。(叱るやうに。)おまへも氣をつけて呉れなくつちやいけないよ。

おとく。

(素直に。)はい。

おとく。

(町子は門内に入りかゝる。)

おとく。

あの。お嬢さん。

(町子は無言で立停まる。)

おとく。

(聲をすこし低めて。)あの、さきほど遠山さんがお出でになりました……

町子。

(あわて、立戻る。)え、遠山さんが……。早くさう云へばいゝのに……。何時頃に來たの。

おとく。

一時間ほど前でございました。お嬢さんはまだお歸りにならないと申したら、これを渡し、てくれと云つて、書いていらつしやいました。(手帳を裂いたら新しい紙きれに萬年筆で書いたらしいのを帯のあひだから探り出す。)

町子。

おまへ讀んだの。

おとく。

いゝえ、横文字で書いてあるんですもの、讀めるもんですか。

町子。

(うなづきながらその紙片をうけ取つて讀む。)わたしこれから鳥渡出て來ようかしら。(また躊躇する。)

おとく。

はい。大崎さんと吉田さんがおいでになつてゐます。

町子。

さう。(また考へながら再びその紙片をよみ返す。)ねえ、おとく。遠山さんはこのごろ公園の待合へ行くといふのを知つてゐて……

おとく。

(曖昧に。)そんなこと存じませんわ。

町子。

(疑ふやうに。)ほんたうに知らないの。ねえ、後生だから隠さないでさ。え、知らないの。遠山さんは淺草公園の光子とかいふ藝妓にお馴染があるといふぢやないか。(すり寄る。)え、

おとく。ほんたうに知らないの。  
存じませんわ。

町子。それから公園の歌劇の女優を連れて、どこへか行つたこともあるつて……。そんなことも知らないの。

おとく。知りませんわ。

町子。(じれる。)隠さないでさ。まつたく知らないの。  
(迷惑さうに。)まつたく知りませんわ。

町子。でも、遠山さんはわたしのゐない時にたびくたづねて来て、おまへと大變に仲よく話してゐるぢやないか。

おとく。あら、お嬢さん。

町子。お前、遠山さんに口止めされてゐるんぢやないの。(睨む。)それでなければおまへも遠山さんとどこへか一緒に行つたことがあるんぢやないの。

おとく。あら、

町子。遠山さんは浮氣者だから何とも云へないわ。男がよくつて、おまけに財産家の息子だから、

誰でも引つかゝるんだわ。

おとく。でも、わたしがそんなことを……。

町子。どうだか知れないわ。

おとく。(困つた顔をして。)お嬢さん。

町子。いゝえ、屹とさうに相違ないわ。わたし、お父さんにいつけて遣るからいゝ。

おとく。(すこし顔を赤くして。)嘘です。嘘ですよ、お嬢さん。わたしが何で遠山さんと……。そんなことがあるもんですか。

町子。知りませんよ。(意地わるさうに。)よござんすか、お父さんにさう云ひますよ。

おとく。だつて、なんにも覚えのないことでも。(少しく聲をうるませる。)お嬢さん、そりやあ無理ですわ。

町子。どうせ無理ですよ。わたしはこんな我儘者の憎まれものなんですから。(罵るやうに。)けれども、ほんたうに遠山さんも遠山さんだわ。なぜわたしにこんなに氣を揉ませるんだらうねえ。

おとく。その手紙になんと書いてあるんです。

町子。

なんにも書いてありやしないわ。ゆうべも人に待惚けを食はして、その云譯だわ。さうして、學校から歸つたら、すぐにいつものところへ来てくれつて……。もう止さう、よしませう。あんまり憎らしいから、今日はこつちで待惚けを食はして遣る方がいゝわ。ねえ、おとく、その方がいゝわねえ。

おとく。

(曖昧に。)さうですね。

町子。

ねえ、その方がいゝだらう。ほんたうにあんな憎らしい人つたらありやしない。

(門内より町子の父善隆、五十に近き僧、ふだん着のままにて出づ。)

善隆。

はてな。こゝへ大崎さんや吉田さんは見えなかつたかな。

町子。

いゝえ。(紙片をふところを押込む。)

善隆。

來なかつたか。

おとく。

どなたもお見えになりません。

善隆。

では、墓地の方へでも行つたのかな。(すぐに引返して去る。)

町子。

(見送る。)お父さんは何をそはくしてゐるんだらう。大崎さんと吉田さんが来て、また墓地のことで悶着してゐるんぢやないかしら。

おとく。

そんなことかも知れません。墓地を縮めることは、檀家の人達のうちにも大分面倒をいふ人があるさうですから。

町子。

(不満らしく。)だつて、仕方がないわ。無駄な墓地を廣く持つてゐるよりも、出来るだけ狭くしてしまつて、その空地を相當の値段で賣る方がいゝわ。こゝらだつて一坪百圓以上の相場だといふから、百坪賣つても一萬圓からになるものを、たゞ明けて置くのはほんたうに無駄なことだわ。勿論、それには方々のお墓をなんとか始末しなければならぬけれど、どこか隅の方へ一緒に改葬してしまへばいゝぢやないか。檀家の人達もそれをぐづぐづ云ふなら、ふだんからそのやうに相當の附届けをして、寺の經濟が立派に行き立つやうにして置いてくれるがいゝわ。この物價の高いのに、ふだんは碌々構つてくれないで、こつちが墓地を整理するといへば、なんとか彼とか理窟をつけて邪魔をしようとする。それぢや寺の人間はどうして生きて行かれるんだらう。檀家の人たちも随分わからずやの手前勝手だわねえ。

おとく。

檀家の人達さへ承知すれば、すぐにお賣りになるんでせうか。

町子。

承知しなくつても、構はずに賣る方がいゝわ。お父さんはあんな風でゐながら、やつぱり

檀家に氣兼ねをしてゐるから、ほんたうに焦れつたくてならないのよ。實際の話がこゝで墓地を整理して、いくらか纏まつたお金をこしらへて置いて貰はなければ、わたし達も安心出来ないわ。

おとく。(やはり曖昧に。)さうでございますねえ。

町子。さうだとも。死んだものよりも生きてゐる者の方が大切ぢやないか。おまへはさう思はないの。

おとく。そりやさうですけれど……。

町子。さう思つたら、おまへからもお父さんにすゝめておくれよ。おまへの云ふことなら、お父さん屹と肯くわ。

おとく。あら。(又もや顔を赤くする。)

(門内より大崎は六十前後、吉田は四十前後、いづれも商人らしき風俗にて出づ。あとより善隆も出づ。)

善隆。大崎。

(追ひ纏るやうに。)まあ、お待ちください。もう一度御相談をいたしたいと思ひますから。(冷かに。)併しあれだけの墓地を賣るといふことになる、ほかの檀家の者がなか／＼素直

に承知する筈がありませんからね。

善隆。

それは御もつともです。それですから、今も色々と御相談をいたしたやうな譯ですが、どうしてもいけませんまいか。

大崎。

吉田さん、どうです。

吉田。

さうですね。

(二人は顔を見あはせて返事に滲つてゐる。善隆は町子とおとくに眼で知らすれば、町子とおとくは遠慮して一先づ花屋の店に入る。)

善隆。

(催促するやうに。)いかゞでせうな。ほかの檀家の者が彼れ是れ云つたところで、つまりあなた方が御承知くだされば何とでも解決は付くと思ひます。御承知の通り、あの墓地をぎりぎり一杯に整理すれば、二百五十坪以上、あるひは三百坪ぐらゐの地所は取れるだらうと思ひますから、坪七八十圓見當としても先づ二萬圓以上にはなるわけです。いや、近所迷惑の工場などを建てさせるのではありません、やはり普通の宅地にする筈で……。

吉田。

普通の宅地にするんですね。

善隆。

さうです、さうです。なにしろ家屋拂底で住宅難の壁がしきりに聞えますので、華族や富

寺の門前

豪連も競つてその庭園などを解放する時代でございますから、いかに寺とは申しながら東京市内に広い墓地を所有してゐるといふことは、どうも宜しくないやうにも存じます。この際、不用の墓地を整理して宅地にいたすと云ふことも、一種の社會奉仕でございますから。

大崎。

社會奉仕……。(やはり冷やかに。)このごろは頻りにそんなことが流行しますね。併しこの墓地の一部を解放すると、そこへ何か料理屋のやうなものが出来るのだといふ噂ですが、まつたくそんなものが出来るのでせうか。

善隆。

この地所を買ひたいと望んでゐるものは、こゝへ料理屋とかカフェーとか云ふやうなものを建てさせて、土地の繁榮を計らうといふ計畫ださうです。(云ひかけて少し躊躇する。)實は、わたくしも寺の近所へそんなものを建てられるのは少々迷惑だとは存じましたが、それが土地の發展にもなることだと云はれてみますと、どうも斷るわけにも行かないので……。

吉田。

(笑ひながら。)そこが例の社會奉仕ですね。

善隆。

まあ、まあ、さういふわけで、たうとう承知するやうになつたのですが、何分にも檀家の

方々の御諒解を得て置きませんと、後日に又いろいろの問題が起りますからな。ことに檀家總代の中でも最も有力のあなた方に、よく其事情を諒解して置いて頂きたいと存じてゐるのです。なに、あなた方さへ確かに御承諾くだされば、ほかの檀家の人達にはわたくしの方からそれなりに御相談をいたしましたも宜しいのです。なにしろ買主の方でもひどく急いで居りました、毎日のやうにまだかくと催促にまゐりますので、わたくしも板挟みになつて、まことに何うも困つてをります。

大崎。

(再び吉田を見かへる。)ねえ、吉田さん。どうでせう。この寺が郡部へでも移轉して、全部改葬といふのなら格別ですが、寺はこのまゝで、その墓地の一部だけを分割して賣るといふことになる、社會奉仕だけでは濟みさうありませんね。あれだけの墓地には随分澤山の墓があります。たとひ其中には無縁の佛があるとしても、あれだけのものを皆んなどこかの隅へ投り込んでしまつて、そのあとへ料理屋やカフェーを建てる。そのうちには新開地の許可を得て、藝者屋でも出来るかも知れない。(苦笑する。)それではどうも檀家の人達も素直には承知しまいと思ふんです。第一、わたしにしてからが、すぐには賛成出来兼ねますからね。

寺の門前

吉田。さうですよ。それもお寺の方で何か今すぐ纏まつた金でもいると云ふやうな問題でもあれば格別ですけれど……。差當つて別にそれほど事もないやうですから……。

善隆。いや、御覽でもありませんが、本堂の屋根がもう大破に及んでをります。屋根ばかりではありません、床も縁側も襖も障子も……。それを残らず修繕いたすには、よほどの費用がかかるだらうと存じます。と云つて、當節柄のことですから、檀家の方々に御迷惑をかけるのも心苦しいでございます。

二人。むむ。(考へてゐる。)

善隆。くどくも申す通り、今度の件につきましては、決してあなた方に御迷惑はかけません。唯あなた方が承認して下さつたといふことになれば、他の檀家へお話いたすにも非常に都合ですから、どうか其邊の事情をお察し下さつて、まけて御承認を願はれますまいか。いかゞでせうな。

吉田。一體今度のことは、買主が直接の交渉ですか。それとも仲介者のやうな者があるんですか。初めから買主が直接に申込んで来たのですから、周旋料のやうなものは一文もいらないのです。

吉田。賣つた金は全部こつちの手に這入るわけなんですね。

善隆。左様、左様、その通りです。

吉田。二萬圓以上……。(かんがへる。)それで墓地の整理や本堂の修繕が出来れば好いわけですが……。併しどうも……。(また考へる。)ねえ、大崎さん。わたし達ばかりでは何とも御挨拶は出来ませんね。

大崎。(冷かに。)どうしても檀家の重立つた人達と、もう一度相談した上でなければ、はつきりした御返事は出来ませんよ。わたしは年寄りだから時代おくれと云はれるかも知れないが、有縁にしろ、無縁にしろ、ほとけは佛で大切にしなければなるまいと思ふ。死んだ者はどうでもいゝと云ふので、鋤や鍬でむやみに人間の骸骨を掘つくり返して、芥溜のやうなところへどしどし投り込むのは、どうも人情でないやうに思はれてならない。いや、まあ、いつまで云つてゐても際限のないことですから、今日はこれで先づ歸るとして、いづれ又あらためて御挨拶に来ることにしようぢやありませんか。

吉田。さうですね。(善隆に。)では、わたし達の方でも考へますから、あなたの方でももう一度よくお考へください。

善隆。(よんどころなく。)はい。なにぶんお考へをねがひます。

大崎。では、ごめん下さい。

吉田。どうもお邪魔をいたしました。

(ふたりは挨拶して上の方へ行きかゝる。)

善隆。あ、吉田さん。

(吉田に戻つて来る。大崎は構はずに去る。)

吉田。なんです。

善隆。(小聲で。)あの、あなたは今晚お宅においでせうか。

吉田。(少しかんがへて。)はあ、宅に居ります。

善隆。(大崎のうしろ影を窺ひながら。)ひよつとすると、七時か八時頃にお邪魔に出るかも知れませ

ん。

吉田。(おなじく小聲で。)はあ、お待ち申してゐます。(云ひすて、去る。)

(花屋の店より町子出づ。)

町子。お父さん。あの人達、随分頑固ね。

善隆。

(意味ありげの薄笑ひ。)なに、さうでもない。大崎さんは兎もかくも、吉田さんの方は何も彼もちやんと判つてゐながら、まあ一應はあんなことを云つてみるのさ。あの人の家へ今夜たづねて行つて、膝ぐみでよく話せば、きつと呑み込んでくれるに相違ない。(袂から巻蓑を出す。)おい、おい。

おとく。(店から出て来る。)

善隆。これに火をつけて来てくれないか。

(おとくは巻蓑をうけ取りて店に入る。)

町子。吉田さんは屹と承知するでせうか。

善隆。む、承知する。わたしが屹と承知させてみせる。なに、周旋人に五分の禮金を拂ふと思

へばいゝのだ。

町子。だつて、あの人に周旋して貰ふんぢやないでせう。

善隆。勿論周旋して貰ふんぢやないが、まあそれと同じやうに、五分ぐらゐの禮金をつかませる

ことにすれば、吉田はすぐに承知するよ。いや、五分には及ばない、三分ぐらゐでも折合

ふかも知れない。(笑ふ。)は、あの男の腹はちやんと讀めてゐるのだ。

寺の門前

町子。

随分ずるい人だわねえ。

(おとくは燈籠に火をつけて持つて出づ。善隆は無言にて受取る。町子は眼で笑ひながら二人をながめてゐる。)

善隆。

(空を仰ぐ。)いゝ天氣だな。空はすつかり秋らしくなつた。

おとく。

ほんたうに静かな日でございますね。

町子。

(堪らないやうに。)はゝゝゝゝゝゝゝ。

(町子はハンカチーフで口を押さへながら足早に門内に入る。おとくは極まりが悪るさうに見送つてゐる。)

善隆。

(苦笑する。)あいつも仕様のない奴だ。(おとくのそばに寄る。)おまへにもからかふか。

おとく。

(小聲で。)えゝ。

善隆。

まあ、かまはずに置け。お轉婆で、我儘で、始末におへない奴だ。年はおまへよりも上だが、まだ學校へ行つてゐるだけに、から子供だからな。あれでも色氣が出たら、些とはおとなしくなるだらう。

おとく。

(思はず笑ひ出さうとして、あわて、袂で口を押へる。)さうでございますね。

善隆。

(見咎める。)なにが可笑しい、何を笑ふのだ。(おなじく笑ひながら。)町子はお轉婆だが、お

おとく。

あら。さうでないといふ證據があるかな。(おとくの肩をたたく。)

善隆。

でも、あんまりですわ。

おとく。

はゝゝゝゝゝ。(笑ひかけて氣がつく。)時に阿母さんはどうした。

おとく。

本所の親類へまゐりました。

善隆。

道理で、さつきから見えないと思つた。さて、おとく。

おとく。

はい。

善隆。

だんく冬が近くなつたからな。おまへには襦袢を買つてやる。しかし町子とお揃ひだと又面倒だからな。町子のより少し廉いのを買つてやるから、それでまあ我慢して置けよ。

いゝか。

おとく。

(おとなしく。)ありがたうございます。

善隆。

町子と違つて、おまへは素直だからな。はゝゝゝゝゝ。

寺の門前



(門内にて鴉の鳴く聲がする。)

おとく。

(見かへる。)あら。鴉がまた来ました。

善隆。

柿が赤くなると油断ができない。叱つ、叱つ。

おとく。

叱つ、叱つ。

(鴉はつゞけて鳴く。)

善隆。

いまくしい鴉めだ。そこらに竹竿があるだらう。

(善隆は尻を引つからけて、店先に立ってかけたる竹竿を把り、柿の木の鴉を逐ひながら門内に入る。)

やがて鴉の聲やむ。善隆は竿を持ちて再び出づ。)

善隆。

毎年のことだが、秋になるとうるさいな。

おとく。

鴉が毎日狙ひに来るので困ります。

善隆。

柿一つでも鴉なぞに取られて堪るものか。いや、鴉ばかりぢやない。子供にも盗まれないやうにしる。こゝらの子供は育ちが悪いからな。(竹竿をおとくに渡す。)

(おとくは竹竿を片附ける。善隆は裾をおろす。)

善隆。

おとく。

おとく。

おとく。

はい。(門前に入る。)

善隆。

さつきからさう思つてゐたのだが、あの車はなんだ。あれは犬殺しの箱車ぢやないか。あんなものをなぜ門の前に置かせるのだ。

おとく。

車を置いたまゝで、兄弟ともどこへか行つてしまつたんでございます。

善隆。

(舌打する。)どうも世話の焼けた奴等だな。こゝの門前は車の置場ではない。まして犬殺しの車なぞは以てのほかだ。慈悲を旨とする寺の門前に、犬殺しの車を置いていくなぞとは、どうも困つた奴等だ。こんなところへ置いて行かれては迷惑する。おい、おまへも手を假

してくれ。

はい、はい。

はい、はい。

その車を隣の塀の前へ押して行くのだ。

はい、はい。

はい、はい。

(善隆は又もや尻をからげ、おとくに手傳はせて、犬殺しの箱車を下のかたへ押して行かうとする。門内にて犬の吠ゆる聲、けたましくきこゆ。二人はおどろいて見かへれば、犬の聲つゞけて聞ゆ。)

犬が大變に吠えてゐますね。

おとく。

おとく。

寺の門前

善隆。

なんだらう。まあ、待て。

(善隆は引返して門内に入らんとする時、納所の隆格、廿二歳、はげしい權幕で犬殺し長吉の腕を引つ掴んで出づ。)

隆格。

貴様は實に怪しからん奴だ。

善隆。

そいつが何うしたのだ。

隆格。

こいつが墓地の生垣を押破つて這入つて來たのです。

善隆。

(長吉を睨む。) なにか盗みにでも這入つたのか。

長吉。

(睨み返すやうに相手の顔を仰ぎみる。) おいらあ泥坊ぢやあねえや。

おとく。

ぢやあ、長ぢやん。どうしたの。

長吉。

おいらがシウマイを喰つて歸つてくると、丁度その横町の角でのら犬に逢つたから、ぶち殺してやらうと思つて追つかけると、垣根の下をくづつてこの墓場へ逃げ込んだから、おいらもあとから追つかけて行つたんだ。泥坊ぢやあねえ。

隆格。

たとひ泥坊でなくつても、境の生垣を押破つて、寺内の墓地へ無断で入込むといふことがあるか。いたづら小僧め。

長吉。

犬が逃げ込んだから追つかけて來たんだ。いたづらぢやあねえ。いたづらでなくても矢はり悪い。そこにある車はお前のだらう。早く挽いて歸れ。

善隆。

(隆格に。) ぢやあ、坊さん。あの犬をこつちへ追ひ出しておくれよ。

長吉。

馬鹿をいへ。

隆格。

(憤然として。) なにが馬鹿だ。こつちは商賣ぢやあねえか。

長吉。

商賣でもいけない。歸れ、歸れ。

善隆。

長ぢやん。もうお歸りよ。

おとく。

だつて、今日はまだ一匹も殺さねえんだもの。(隆格に。) おい、後生だから追ひ出しておくれよ。

長吉。

後生を知つてゐるなら、そんなことをするな。

隆格。

(じれて舌打する。) 判らねえ人達だなあ。

長吉。

(下の方より長吉の兄長太、廿四五歳、やはり棒を持ち出づ。)

長吉。

(見かへる。) おい、兄い。いゝところへ來てくれた。

長太。

なんだ、なんだ。

長吉。

首環のねえ犬を見付けたから、追つかけて行つてぶち殺さうと思つたら、こゝの人達が邪魔をして仕様がねえんだ。

長太。

その犬はどこにゐる。

長吉。

(門内を指さす)この寺のなかに隠れてゐるんだ。

(犬の吠ゆる聲きこゆ。)

長吉。

ほら、鳴き聲がきこえるだらう。

長太。

たしかに首環はねえのか。

長吉。

(うなづく)む。

長太。

(すゝみ出づ)もし、旦那方、まことに相済みませんが、ちよいと御門のなかへ這入らせて頂くわけには参りませうまいか。

善隆。

折角だが、それは断る。今もその子に云つたのだが、一旦こゝへ逃げ込んだ犬をおまへ方の手に渡すわけには行かないのだ。

長太。

(不満らしく)いけませんか。

善隆。

いけない。普通の在家とは違つて、こゝは寺だ。その門内へ逃げ込んだ以上、どうもおま

へ方に殺させることは出来ない。

(犬の聲又きこゆ。)

長吉。

(のび上りて門内をのぞく)あ、まだ吠えてゐるやあがる。

長太。

お願いですから何うかしてくれませんか。御門のなかへ這入つて悪ければ、表へ追ひ出してくれませんか。

善隆。

あの犬はなんと鳴いてゐるのか。おまへ達に判るか。

長太。

(あざ笑ふ)冗談云つちやあいけねえ。いくら犬殺しだつて、犬の鳴く聲がわかるものか。おまへさんに判りますか。

善隆。

判る。ちやんと判つてゐる。あの犬は救ひを求めてゐるのだ。たとひ首環のない犬にしろ、のら犬にしろ、生あるものを無慈悲に殺すのを、われ／＼が黙つて見てゐられるものではない。あの犬はわれ／＼の法衣の袖の下に隠れてゐる。それを救つてやるのは出家の務だ。

長太。

(反抗的に)そつちが務なら、こつちも務だ。わつし等だつて、洒落や慰みに生物を殺してあるくんぢやあねえ。警視廳から立派に野犬撲殺業の鑑札を貰つて、今日の商賣にしてゐるんだ。道楽半分に鐵砲をかついで、雉や鳩をほん／＼撃つてあるくのととは譯が違はあ。

第一、のら犬をぶち殺して悪いものなら、警視廳で鑑札をくれて置く筈がねえちやありませんか。寺でも唯の家でも、理窟に變りはねえ。のら犬を隠まつて置くのは、お尋ねものを隠まつて置くやうなものだ。意地の悪いことを云はねえで、早く犬を出しておくんなさい。

善隆。

いや、意地の悪いといふわけではない。なるほど警視廳の鑑札を持つてゐる立派な職業でもあらうが、それはおまへの方でいふ理窟で、慈悲を旨とする我々として見れば、自分の寺内へ逃げ込んだ犬をどうも見殺しにすることは出来ない。わたしの方でも頼むのだ。早く歸つて貰ひたい。

長太。

歸れませぬね。

隆格。

歸れない……。まだおまへには判らないのか。我々は出家であるから、慈悲を旨としなければならぬ。そこで……。

長太。

え、そんな御説教はどうでもい。何度云つても同じことで、わつし等は洒落や慰みに犬殺しをしてゐるんぢやねえ。一匹殺せば廿銭になる。それで親子兄妹が今日の命をつないでゐるんだ。わつしの家にはレウマチスで體が半分利かねえお袋がある。まだ小學校へ

長吉。

通つてゐる妹もゐる。(長吉を指さす) 這奴とわつしと、三度の米を食ふ人間が四人も鼻をそろへてゐるんだ。慈悲も殺生もあるもんか。犬を殺さなければ生きてゐられねえんだから仕方がねえ。犬が大事か、人間が大事か。よく考へて見てくれるがい。お前さん達がほんたうに慈悲といふことを知つてゐるなら、あの犬をこゝへ追ひ出して来て、わつし等に殺させてくれるのが當りめえだ。犬を見殺しにするのが可哀さうか、人間を見殺しにするのが可哀さうか、おまへさん達にもそのくらの理窟は判りさうなもんぢやあねえか。嘘だと思ふならこの箱をあけて見せてやる。けふは朝から間が悪くつて、まだ一匹もぶち殺さねえんだ。こんなことぢやあ明日の米も買へねえ。こつちでも頼むから、つまらねえ文句を云はねえで、早くあの犬を追ひ出しておくんなさい。ぐづくしてゐると日が暮れらあ。

ほんたうだ。下らねえ御説教みたやうなことを云つてゐねえで、早くあの犬を出しておくれよう。

(長吉は再び門内へ押込まうとするを、隆格は遮る。奥より町子は以前の着物を着かへ、華やかに粧ひて出づ。)

寺の門前

町子。あら、どうしたの。

長吉。(町子に。)おい、姐さん。あの犬をこつちへ追ひ出しておくれよ。

町子。(甚しい侮辱を感じたやうに。)わたし知らないわ。お父さん、なんだつてこんな者を御門の中へ入れようとするの。

善隆。いや、そいつが無理に押込まうとするのだ。(長吉に。)さあ、早く行け、行け。

隆格。行けといふのに……。

(隆格は長吉の腕を捻ぢあげるやうにして表へ突き出す。)

長太。やい、やい。おれの弟をどうするんだ。生臭坊主の木魚野郎め、いくら高慢な面をしやあがつても、手前が十二階下へ毎晩ひやかしに行くことはちやんと知つてゐるんだぞ。

長吉。さうだ、さうだ。池のそばのおでん屋でコップ酒を飲んでるやあがつたのは、あの蝸坊主だ。さまあ見やがれ。

隆格。(赤面して。)こいつ飛んでもないことをいふ奴だ。貴様のやうな奴は家宅侵入で巡査に引渡すからさう思へ。

長吉。誰が引渡されるものか。(持つてゐる棒をとり直して身構へする。)

おとく。長ちやん。およしよ。

長太。構ふもんか。あの犬をなぐり付けるつもりで、その鼻入の向う脛をかつ拂つてしまへ。

隆格。なんだ。(腕まくりして行かうとする。)

善隆。まあ、よせ、よせ。あんなものを相手にしても仕方がない。

町子。でも、あんな奴は懲しめのために、巡査に引渡してやる方がいゝわ。

長吉。なにを云やあがるんだ。ハイカラの、色氣ちがひの、どた福め。

おとく。(心配して。)長ちやん、もうおよしといふのに……。

長太。止すも止さねえもねえ。犬さへ渡してくれりやあ文句はねえんだ。おい、早く犬を出してくれ。

善隆。え、うるさい、うるさい。貴様達がいくら何と云つても、一旦この寺へ隠れた犬を渡すことは出来ないのだ。

町子。こんな人間には動物愛護といふことが判らないんだから仕方がないわねえ。

隆格。どうで犬殺しなんぞしてゐる奴等ですもの、そんなことが判るものですか。

長太。なんとでも勝手に云へ。手前達にほんたうの人間が判つてたまるものか。やい、長吉、こ

長吉。

んな亡者どもを相手にしてゐると日が暮れらあ。もう好加減にして行かうぢやねえか。ばかノ、しいや、行かう、行かう。

(長太と長吉は箱車のそばへ行く。)

隆格。

早く行け、行け。二度とこの門前へそんな車を挽いて来るなよ。

長吉。

大きにお世話だ。やい、づくにふ。今度十二階下で出つくはした時にやあ、だしぬけにこ

れで撲り付けるから、頭に鉢巻をして待つてゐる。わあい、赤い顔をしてるやあがらあ。

坊主、入道、蝸坊主。

隆格。

(長吉はそこらにある小石を拾ひて隆格に投げつけ、笑つて嘲しながら下のかたへ逃げてゆく。)  
這奴、怪しからん。

長太。

(隆格は當座の立腹に幾分のてれ隠しもまじつて、教團あらく下の方へ追つて行く。)  
やい、この坊主、弟に指ても差すと料簡しねえぞ。

(長太も車をすて、隆格のあとを追つてゆく。)

町子。

ほんたうに呆れた奴だわねえ。

善隆。

まつたく仕様のない奴等だ。(氣が付いて尻からげの裾をおろす。)  
いや、それでもまあ善いこ

町子。

とをしたよ、わたし達のおかげで一匹の犬の命が助かつたのだからな。  
助けられた犬も幸福だし、助けたわたし達も幸福ですわ。

おとく。

(心から感じたやうに。)  
まつたく善いことをなさいましたわねえ。  
あいつ等がなんと云はうとも、慈悲善根をすると好い心持だ。(俄に氣のついたやうに。)

善隆。

に町子、おまへはそんなりをして、これからどこへ出かけるのだ。時

町子。

上野の金澤さんのところへ行つて来るんです。

善隆。

む。學校のお友達のところへ行くのか。

町子。

ピアノのお遊びがある筈ですから、今夜は遅くなるかも知れせんわ。

善隆。

遅くなるやうなら隆格を迎ひに遣らうか。

町子。

(あわてゝ。)  
いえ、それには及びせんわ。お父さんも今夜お出かけになるんぢやありま

せんか。

善隆。

む。吉田さんのところへ行かなければならない。いや、その前に少し調べて置くことが

あつたのを、今の犬騒ぎですつかり忘れてしまつた。

(善隆は足早に門内に入る。)

町子。

おとく。

町子。

おとく。

町子。

おとく。

町子。

おとく。

町子。

おとく。

町子。

隆格。

仕様がないわねえ。あの車をやつぱりそこへ置いて行つて……。

隆格さんはどこへ行つたんでせう。

（心付いたやうに。）あのね。お父さんが隆格を迎ひによこすと云つても、わたしがそれには及ばないと云つたと云つて、屹と遣さないやうにしてお呉れよ。いゝかい、頼みますよ。

はい。

今も聴いてゐた通り、今夜はお友達のお友達の金澤さんのところへ遊びに行くつもりになつてゐるんだからね。

（微笑む。）やつぱりいつもの所へいらつしやるんですか。

（おなじく微笑む。）あんまり憎らしいから待惚けを食はしてやらうと思つただけけれど、それも可哀さうだからねえ。いゝかい。お父さんには黙つてゐておくれよ。

（下の方より隆格は汗をふきながら出づ。）

あの二人はどうして……。

……。

巡査に引渡してやらうと思つたのですが、しきりにあやまるから堪忍してやりましたよ。

（隆格の少しあともより長吉出で、この對話を聴いてゐる。）

町子。

隆格。

（不満らしく。）あやまつたばかりで堪忍して遣つたの。でも、あんな奴等を相手にしても仕様がありません。犬さへ助けてやれば、それでいゝのですから。

（云ひかけてうしろを見かへり、長吉と顔を見あはせて隆格は屹と彼を睨みしか、そのまゝ、足早に門内に入る。）

長吉。

（笑ひながら進み出づ。）嘘だぞ、嘘だぞ、誰があんな臍入にあやまるもんか。あの坊主。あべいべに兄きに嚇かされて、這々の體で逃げて來やがつたんだ。

（下の方より長太出づ。）

長太。

はゝ、意氣地のねえ坊主だ。真剣におれと命の取り遣りをするかと云つたら、あいつ青くなつて、ふるへ上がつて逃げて行きやあがつた。はゝゝゝゝ。さあ、長吉、行かう。

こんな間のわるい日はねえな。

まつたくだ。これも厄日で仕方がねえや。

歸りに又、日なしのお婆さんのところへ寄つて行くのかい。

長太。

さうでもしなけりやあ凌けねえ。

寺の門前

(ふたりは箱車のそばへゆく。門内にて又もや犬の聲高くきこゆ。)

長吉。まだ吠えてるやあがる。

長太。いまくしい畜生だ。人をじらすやうに無暗に吠えやあがる。

(二人は門内を見かへりながら車を挽き出さうとする。犬の聲つゞけてきこゆ。)  
大變吠えるわねえ。

町子。(不安らしく) どうしたんでせうねえ。

(門内より隆格は高箒を持ちて走り出づ。)

隆格。氣をおつけなさい。あの犬が今お住持を咬んだのです。

町子。あら、お父さんが犬に咬まれたの。

おとく。まあ。

(おとくはあわて、門内に走り入る。町子もつゞいて行かうとして、又立ちどまる。)

町子。でも、怖いわねえ。狂犬ぢやないかしら。

さうかも知れませんが。だしぬけにお住持の足に咬み付いて、それから本堂の縁の下へ逃げ込んだらしいのです。(長太等を見て) まだそこにゐるたか。丁度い。早く来てあの犬を撲

隆格。

町子。

殺してくれないか。

そんな犬、早く殺してしまつた方がいゝわ。

(門内より善隆はおとくに扶けられて出づ。善隆は左の足を犬に咬れて、びつこを曳いてゐる。)

善隆。

いや、ひどい目に逢つた。早く犬殺しを呼んで来い。おゝ、まだそこにゐるたか。おい、お

い、構はずに内へ這入つてあの犬を撲殺してくれ。

長太。

(笑ひながら) 殺すのは可哀さうだ。さあ、行かう。

長吉。

(あわて、) おい、おい。待つてくれ。あの犬をどうかしてくれないか。

隆格。

まあ、待つてくれ。

町子。

待つて頂戴よ。

おとく。

長ちやん。

幕

(四人は口々に呼ぶ。長太と長吉は見かへりもせず車をひき出してゆく。)



綺堂戲曲集(第三卷)終

大正十三年十二月十五日發行

綺堂脚本集第參卷  
(定價金貳圓參拾錢)

著作者 岡本敬二

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所 常磐印刷所

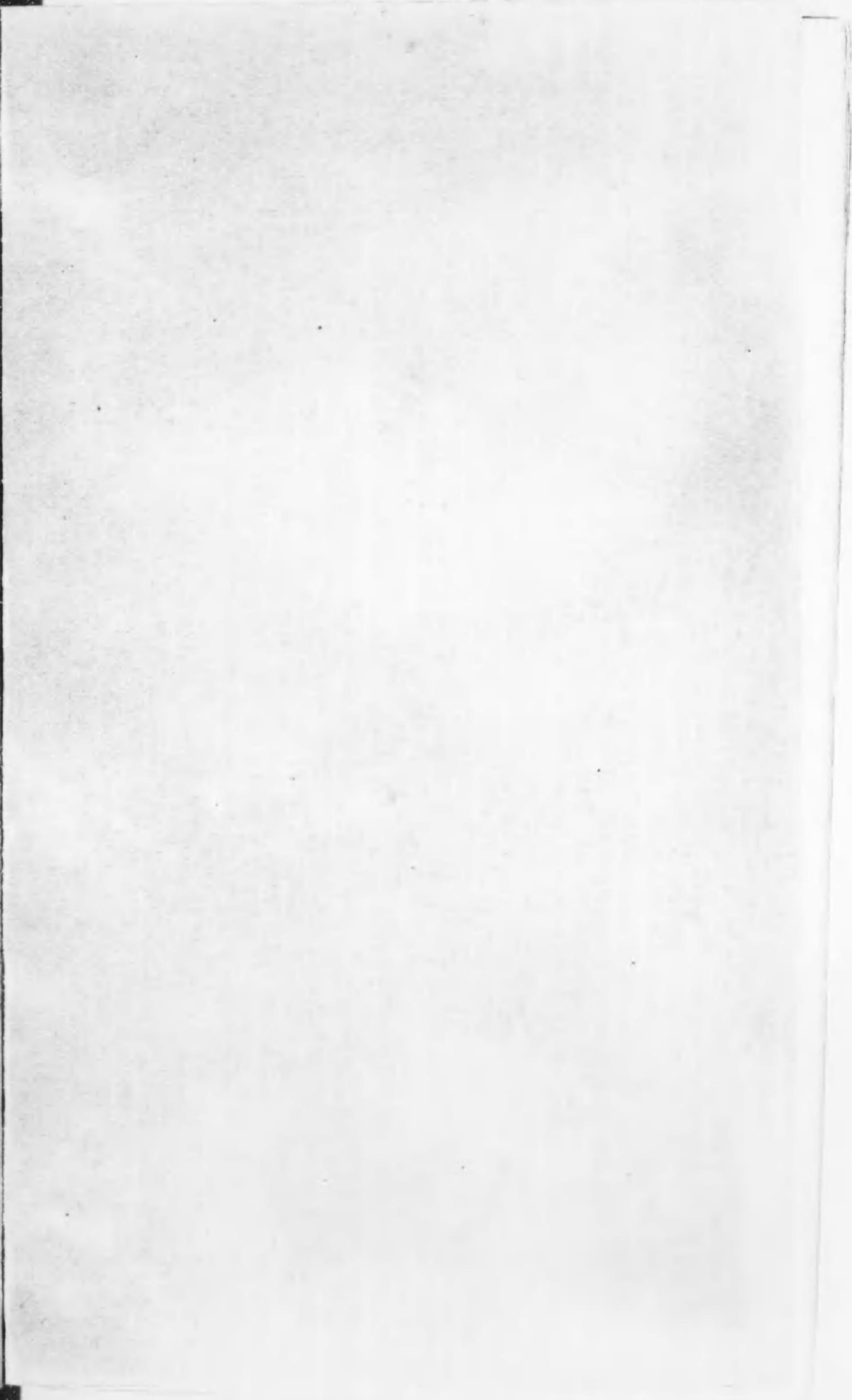
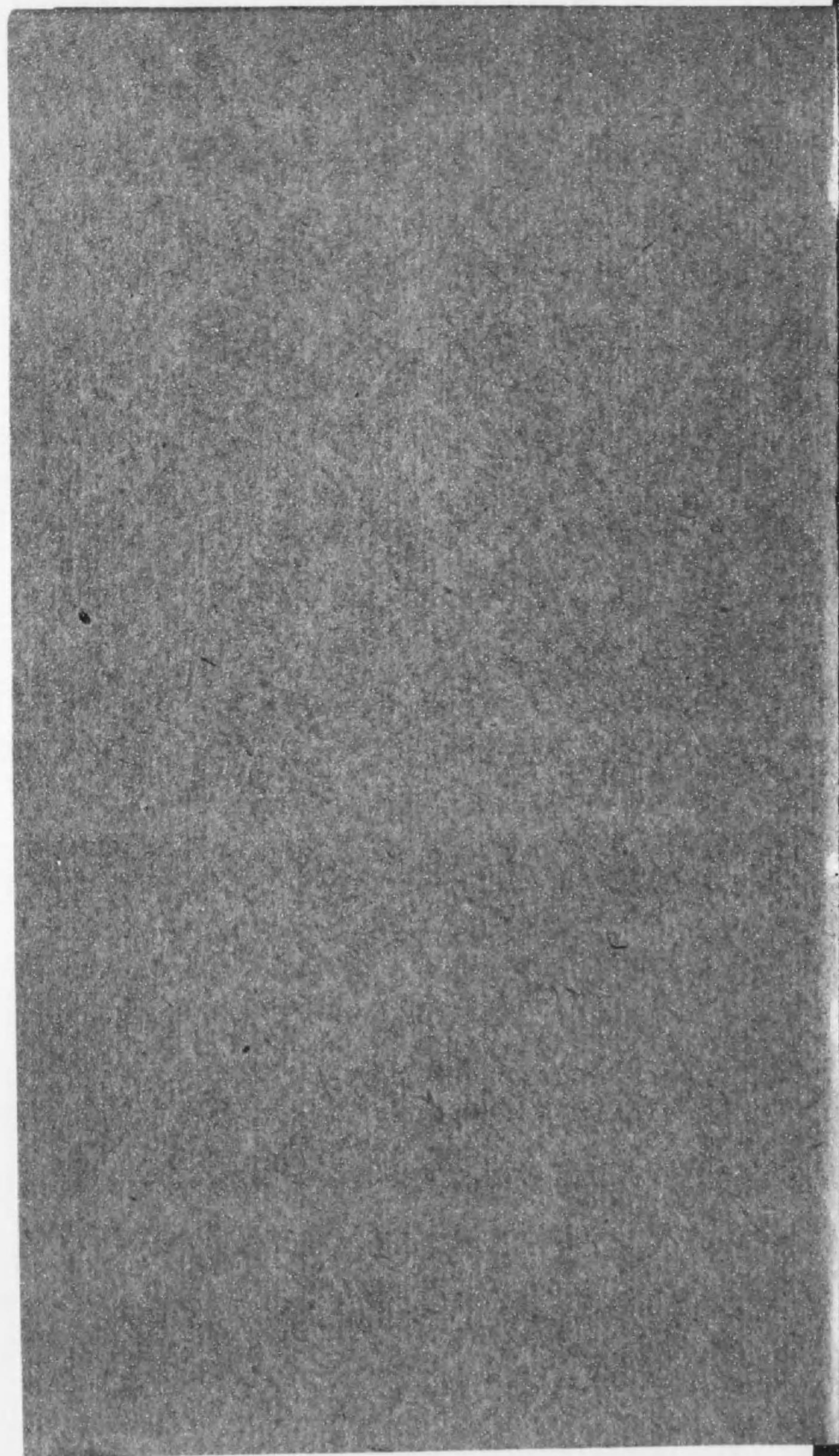
著者作印



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地  
(電話大手五十一・日本橋五一)  
(振替口座東京一六一七)

春陽堂



527  
16

終

